

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370413

研究課題名(和文)台湾変革期における中国から受容された2度の大正文学の影響に関する研究

研究課題名(英文)The Research of two influences on the Taisho literature received from China at the change term of Taiwan

研究代表者

工藤 貴正 (KUDOH, Takamasa)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：80205096

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の植民地時代の1920-30年代と、戦後に国民党が台湾に渡って再植民地化した1950-70年代に、中国経由で渡った2度の大正文学の影響が台湾にあることを実証することを目指した。しかし、2015年の天理大学と輔仁大学の国際学会での発表を通し、台湾での中国新文学運動の影響は定説で宣伝されるほどは大きくないことが判明した。そこで、中華民国期の日本に留学した知識人が中国に帰国し、戦後台湾に中国国民党と共に渡来し、普及させた大正主義(生命主義と民主主義の総称)の実像の解明に挑むことになった。そのために、本研究では、先に大陸・中国での大正主義の受容とその崩壊がどのように進化したかを解明した。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to prove that it has the two influences of the Taisho literature in Taiwan. One time is from the 1920s to the 1930s in the Japanese colonial time and second time is from the 1950s to the 1970s when Chinese Nationalist Party recolonized Taiwan after the Pacific War. However, as I presented at the international conference in Tenri(天理) University and the Furen(輔仁) University in 2015, the influence of China on New Literary Movement supposed to be smaller than the established theory. Henceforth, I elucidated of the real image of the Taisho-ism (the general term of Vitalism and Democracy) which the intellectuals who studied in Japan in the Republic of China term went back to China and after the war they came back to Taiwan with Chinese Nationalist Party and spread it through Taiwan. Therefore, I investigated the acceptance and collapse of the Taisho-ism previously in mainland China.

研究分野：中国近現代文学、日・中・台比較文化文学

 キーワード：大正生命主義 大正デモクラシー マルクス主義文芸理論 第三期創造社 戦後台湾 張我軍 馮乃超
雷震

1. 研究開始当初の背景

- (1) 厨川白村の文芸理論が戦前・戦後の2度に亘り、台湾で受容されていたことを研究代表である工藤は確認していた。そこで、「台湾新文学運動には中国新文学運動からの影響がある」と定説に言われる通りであれば、中国新文学運動は明確に日本文学からの影響が認められたので、当然中国経由で台湾に齎された日本文学の影響があるだろうことが予想された。
- (2) 戦後は、上海で隆盛した創造社や上海新感覚派の文学に顕著に大正文学からの影響が認められたので、中国国民党の台湾への移住と共に中国経由での日本文学の影響があることが想定された。

2. 研究の目的

- (1) 本研究は、戦前・戦後の2度に亘って台湾に齎された大正文学のそれぞれの意義を解明することを目的とした。ところが、2度の国際学会での発表のための資料収集と分析・考察を通して、1度目の時期である1920-30年代の台湾には、そもそも中国新文学運動の影響は定説で宣伝されるほどは大きく影響していないことが判明した。唯一、厨川白村だけが例外であった。そこで、以後研究は、戦後台湾に渡った中国国民党と共に、1949-78年に中国語で齎された大正主義（「大正文学」という概念では収まり切れない、「生命主義」と「民主主義」の総称した概念）の実相を解明することを目的とした。
- (2) そのために、本研究では、先に大陸・中国での大正生命主義の受容がどのように行われ、個人主義や人道主義に支えられた大正生命主義はどのような理由で崩壊したかを解明することを目的とした。その上で、戦後台湾にはどのような理由で中国経由の大正生命主義を包含する大正主義が移植されたかを明らかにすることを目的

とした。

3. 研究の方法

大正主義の時代の文学・思想を日本留学体験あるいは読書体感を通して受容した中国と台湾の知識人—中国新文学運動の旗手として①魯迅と②周作人、初期共産主義運動の指導者として③李漢俊、北京で大正・昭和期の日本語の作品を中国語に翻訳した台湾人の④張我軍、関東大震災後の日本の急速な集団主義化を感じ取った台湾人の⑤劉呐鷗と⑥張深切、京都帝国大学法学部で民主憲政論を学び帰国し、その後の台湾の民主化に献身した⑦雷震、福本和夫のマルクス主義革命論に強く共感し、「革命文学論」を提唱した第三期創造社の⑧馮乃超、⑨李初梨、⑩彭康、そして日本共産党に入党し蔵原惟人理論の影響を受け、1933年に強制送還され、毛沢東時代に「反党」「反革命」集団の主犯とされた⑪胡風、以上11人を大正主義受容の典型的知識人として、中国と台湾で日本の大正主義の文学及び思想がどのように機能したかを考察する。本研究の補助金の交付期間中には、①魯迅、②周作人、④張我軍、⑦雷震、⑧馮乃超の5名を特に挙げて考察を行った。

4. 研究成果

- (1) 台湾新文学運動には力説されるほどの中国新文学運動の影響はないこと。

近年刊行の陳芳明『台湾新文学史・第三章』（台北市・聯経出版、2011.10）でも、張我軍の「台湾の文学は、中国文学の一支流である」説（『台湾民報』3巻1号、1925.1）を抛り所に、『台湾民報』に、胡適、魯迅、郭沫若、謝冰心、馮沅君、鄭振鋒（鐸の誤り）、焦菊隱、劉夢葦等の「大量の五四文学作品」が掲載されたとして中国との連帯性を強調する。しかし、啓蒙運動としての「口語運動」が踏襲される以外は、女性問題改革や社会改革を含む思想的な精神の

連帯は気薄である。その証拠に、『新青年』の主要なメンバー陳独秀、周作人は台湾には登場しない。この点に関しては、中島利郎の「台湾が日本統治下の殖民地であるという政治的な考慮の外においていた」(『台湾近現代文学史・第一章』研文出版、2014.5) という指摘は重要であろう。

- (2) 1923年9月の関東大震災を契機に日本留学の中国知識人(後期創造社の成員、馮乃超・李初梨・彭康)は、個人主義で人道主義的でもある「大正生命主義」の文学を放棄し、集団主義で階級性を重視したマルクス主義文芸論の文学へと轉身していることが明らかになった。
- (3) 日本留学の台湾知識人には、関東大震災を契機に個人主義と享楽主義が戒められ、国民精神の作興と国家の興隆を図る国家主義が隆盛する一方、集団主義で階級性を重視したマルクス主義のプロレタリア文学が一世風靡する日本の状況を体験することで、第三の選択であるモダニズム文学としての新感覚派を上海に伝えた劉呐鷗がいた。また、関東大震災後の日本を離れ、生ぬるい人道主義的な「生命主義」を放棄した作品を書いて、社会主義運動へと身を投じたのが台湾知識人の張深切であった。
- (4) 1919年から1926年まで日本留学を体験した雷震は、大陸・中国に帰国後、1949年に蒋介石と共に台湾に移住し、自身が主編する雑誌『自由中國』で法治主義、民主立憲、人権尊重の思想を追求して、白色テロによる被害の当事者となるも、戦後台湾に立憲民主主義を根付かせた。この政治思想と人権尊重の思想の源流が「大正主義」特に「大正デモクラシー」精神にあることを、京都帝国大学法学部の恩師・森口繁治の『近世民主政治論』、『立憲主義と議会政治』、『憲政の原理と其運用』などの一連の著作にあることを今後立証できる資料が収集できた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

1. 工藤貴正、「文学革命」から「革命文学」の時代への転換(上) —馮乃超の日本における大正生命主義の受容、愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)50号、査読無、207-223頁、平成30.3(2018)
2. 工藤貴正・吉田陽子訳、《新青年》與大正生命主義思想—魯迅《狂人日記》和周作人《人的文學》的成立以及其思想性意義、社会科学院出版『上海魯迅研究・魯迅手稿研究專輯』、査読有、159-181頁、平成29.8(2017)
3. 工藤貴正、『新青年』と大正生命主義思想—魯迅「狂人日記」、周作人「人的文学」の成立とその思想的意義、『愛知県立大学外国語学部紀要』(言語・文学編)第49号、査読無、159-179頁、平成29.3(2017)
4. 工藤貴正、台湾新文学運動と厨川白村：北京からやって来た「大正生命主義」、『愛知県立大学外国語学部紀要』(言語・文学編)第48号、査読無、203-230頁、平成28.3(2016)
5. 工藤貴正、台湾映画『父の初七日』の葬送儀礼と文化アイデンティティ、『中国21』46号、愛知大学現代中国学会、査読有、33-62頁、平成26.8(2014)

[学会発表](計6件)

1. 工藤貴正、毛沢東『文芸講話』の構築と機能を巡って、「毛沢東に関する人文学的研究」共同研究班、平成29(2017)年12月22日、京都大学人文科学研究所
2. 工藤貴正、共産主義青年・馮乃超：圍繞在日本所體驗的‘大正主義’以及其後的思想展現(中国語での発表)、「近代東亜知識人的国家構想」学術シンポジウム、平成29(2017)年12-2日、台湾・中央研究院近代史研究所

3. 工藤貴正、從“文學革命”的時代轉換為“革命文學”的時代—以馮乃超接受日本的大正生命主義與馬克思主義文藝理論為例（中国語での発表）、第12回東亜学者現代中文国際学術シンポジウム、平成29(2017)年10月28-29日、名古屋大学
4. 工藤貴正、《新青年》与大正生命主義思想—魯迅《狂人日記》和周作人《人的文學》的成立以及其思想性意义、招聘講演(中国語)、平成28(2016)年8月30日、上海・復旦大学中文系
5. 工藤貴正、北京から台湾にやって来た大正生命主義—『台湾民報』における張我軍の時差翻訳を視座として、国際シンポジウム「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」、平成27(2015)年11月14-15日、台湾・輔仁大学
6. 工藤貴正、『台湾民報』に散見する大正生命主義の意義—台湾における所謂「中国新文学運動」成果の受容を検討の軸に、天理台湾学会第25回記念研究大会、平成27(2015)年6月27-28日、天理大学

[図書] (計2件)

1. 工藤貴正、冥界旅行に描く漢族社会の特性—階級・インサイダー・コネ・拝金・愛人、『現代アジア学入門』芦書房、鈴木隆・西野真由編、63-80頁、平成29.3(2017)
2. 工藤貴正、厨川白村現象在中国与台湾、台湾・秀威資訊出版、全311頁、平成29.1(2017)

[産業財産権]

- 出願状況(計0件)
- 取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

[書評](計3件)

1. 工藤貴正、菊池一隆『台湾北部タイヤル族から見た近現代史—日本植民地時代から国民党政権時代の「白色テロ」へ』(集広舎、2017.3)『現代中国研究』40号、92-99頁、平成30.2(2018)
2. 工藤貴正、中井政喜著『魯迅—後期試探』図書新聞3293号4面(文学・芸術)、平成29.3.4(2017)
3. 工藤貴正、松村志乃著『王安憶論—ある上海女性作家の精神史』週刊読書人6面(読物・文化)、平成28.7.1(2016)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤 貴正 (KUDOH Takamasa)
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号：80205096

(2) 研究分担者

無

(3) 連携研究者

無